

# 雪の国と太郎

小川未明

青空文庫



はるかなそりの跡あと

この村むらには七つ八つから十一、二の子供こどもが五、六人にんもいましたけれど、だれも隣となりむら村たろうの太郎たろうにかなうものはありませんでした。太郎たろうは、まだやつと十二ばかりでした。けれど力が強ちからつよくて、年としのわりあいからだに体おほが大きくて手足てあしが太ふとくて、目めが太おほ大きく円まるくて、くるるとちようど、わしの眸ひとみのようくろに黒くろくて光ひかっていました。

だから、この村むらの子供こどもはだれも太郎たろうとけんかをして勝かち得うるものはありません。みな太郎たろうをおそれていました。

「今日きょう君きみは太郎たろうを見たみかい。」

と、甲こうがいました。

「僕ぼくは見たよ。」

と、丙へいが答えました。

「なにもしなかったかい。」

と、甲こうが丙へいを見て問といました。

「遠とおくだったから、なんにもしなかったよ。僕ぼくは急いそいで帰かえってき

たよ。」

と、丙へいが答こたえました。

「明日あしたも学がっ校こうへゆくときには、みないつしよにゆこうよね。そ

うすれば太郎たろうがきたってだいじょうぶじゃないか。」

と、乙おつがいだしました。

「しかし君、太郎は強いんだよ。」

と、丙がいました。

「だってみんなでかかれば太郎一人なんか負かしてしまいうね、僕は足を持つてやる。」

と、乙が力んでいました。

「僕はぶつてやるよ。」

丙がいました。

「僕は雪の中へうずめてやろう。」

甲がいました。そしてみんなで声をたてて笑いました。

その明るくなる日になると雪が降っていました。朝、甲・乙・丙・丁の四人の子供は、たがいに誘い合つて学校へ出かけました。

路みちばたのきすぎの木の枝は雪がたまってたわんでいます。そして、  
その下したを通とおるときには、くぐつてゆかなければなりません。寺てらの  
横よこを通とおつたときには、もう雪ゆきが地ちの上うえにますます積つもつて墓はかいし石いし  
の頭あたまがわずかばかりしか見みえていませんでした。子供こどもらは自分じぶんの  
村むらをすこし離はなれたところに学がっこう校がっこうがある。そこへ歩あるいてゆくので  
した。村むらを出でると、広ひろ々びろとした野原のほらがありました。野原のほらは一面めん  
に見渡みわたすかぎりも雪ゆきにうずまって真まつ白しろに見みえました。そしてそ  
こへ出でると、その跡あとも風かぜにかき消けされて、あるかなしかにしか  
見みえなく、寒さむい北風きたかぜが顔かおや手てや足あしを吹ふいたのでした。

きみ ぼく けらい  
君は僕の家来

ようやくその野原のほらを通りとおこして、かなたの森もりの中なかから学校がっこうの屋根やねが見える村むらはずれにさしかかりますと、いままでどこかに隠かくれていた太郎たろうが飛び出だしてきて、まつさきになって歩いてきた乙おつに突つきあたりました。乙おつは不意ふいをくらってたじたじとなつて雪ゆきの中なかに倒たおれてしまいました。

「僕ぼくはなんにもしないじゃないか。」

と、乙おつは雪ゆきの中なかに倒たおれながら、うらめしそうに太郎たろうの顔かおを見上みあげていいました。太郎たろうはじつと雪ゆきの中なかに倒たおれて自分じぶんを見上みあげている乙おつを見下みおろしながら、

「なんで、先せんだつて僕ぼくが遊あそぼうといつて呼よんだときにこなかつた

のだい。君は僕の家来になるといったんだろう。」

と、太郎はくるくるした黒目を光らしていました。

その間に、甲・丙・丁などは、すきをうかがって逃げ出して早く学校の門へ入ってしまったおうと、あちらに駆け出しました。太郎は、そのほうをしりめにかけて、あえて追おうとはいたしませんでした。

「あ、僕が悪かったのだから堪忍しておくれ。」

と、乙は、わなわなとふるえながら太郎にたのんできました。

「きつとかい。僕の家来になったのなら、帰りに待っておれ。いつしよに帰るから、うそをいったら、今度ひどいめにあわしてやるから。」



と、太郎はいつて、自分は先になつて学校の方へゆうゆうと歩いてゆきました。その後から乙はついてゆきました。

その日の午後、授業時間が終わつて学校から帰るときに、甲・丙・丁は、いちはやく逃れて帰ることができました。けれど、乙だけは太郎と約束をしたので逃げて帰ることができずに、ついに太郎といつしよに帰ることになりました。

乙は太郎がどんなことをいい出すかしらんと心のうちでおそれていました。太郎は乙をふり向いて、

「君、海へいつてみようよ。」

といいました。

海には一里ばかりありました。広い野原を越して高いおかを上

つてそれを下りなければ、海を見ることができなかつたのです。

「海なんかおもしろくないじゃないの。」

と、乙はさも迷惑そうにいました。

「君は冬の雪の降っている海を見たことがあるかい。それは盛んだぜ。毎晩ゴーゴーといって鳴り音が聞こえるだろう。僕は海を見ながらハモニカを吹くんだぜ、僕といっしょにゆこう。」

と、太郎はくるくるした目をみはりました。

「だって帰りがおそくなると、お母さんにしかられるもの。海なんか遠くて、ゆくのはいやだ。」

乙は泣き声を出していいました。

「ほんとうにいやだなら、いじめてやるぞ。」

と、太郎は雪路の上に立って、怖ろしいけんまくをしてみせておつ乙をおどしました。乙は大きな声をあげて泣き出しました。ちようどそこへ、乙の知ったおじいさんが通りかかったもので、「おい、けんかをしていかんぞ。」

といったので、太郎は独りであちらへいってしまい、乙はおじいさんに連れられ、その日は家に帰りました。

雪の上のハモニカ

その明くる日、甲・乙・丙・丁はまた集まって相談いたしました。

「おい、君が悪いんじゃないか、いちばん先に君が逃げたんだぜ

。」

「僕じゃない、いちばん先に逃げ出したのは君だぜ。」

彼らは、たがいに前の日のことをいい争いましたが、ついに、

もうこれからは、かならずいっしょになつて、太郎を敵として戦

わなければならぬということに決めました。

四人の子供らはその日から隊を組んで隣村へ出かけていっ

て太郎とけんかをしました。しかし先方はいつも太郎一人であ

りました。太郎は例の大きな目をみはつて路の上に立つて、こち

らを見ています。するとこつちでは、四人の子供が口々に太郎

をめがけてののしつて、雪を握つては投げつけました。おおぜい

ひとり一人ですから、遠く隔てて雪を投げるのでは、いつも太郎に雪球が多くなりました。そして四人の子供は凱歌をあげて村へ帰りました。

学校へゆくときも四人はそろって太郎にあつたら、必死となつて戦う覚悟でありましたから、太郎は、それを見てとつてか容易に手出しをいたしませんでした。

こうなると甲・乙・丙・丁らは、まったく自分らが勝つたものと思ひました。そして家に帰ると四人はそろって太郎を征伐するのだといつて出かけました。しまいには四人のほかにも年下の七つ八つぐらいの子供が三人も四人も後からついてきたのであります。しかるに太郎のほうはいつも一人でありました。太郎は

路のまん中に立つて勇敢に戦いました。こちらは、たとえおおぜいであつたけれど、だれひとりとして進んでいつて太郎と組み打ちをしようというほどの勇氣のあるものはなかつたのであります。

ある日のこと、こちらのおおぜいのものは、隣村の方へ出かけてゆきました。けれど、いつもそこに立つて、こちらを向いておおぜいを迎えている太郎の姿が見えなかつたのであります。

「どうしたんだらうね、太郎が見えないよ。」  
と、甲がいました。

「どこかに隠れているんだらう。」  
と、乙がいました。そして、いつまで待っていても太郎の姿が

見みえませんでした。その日ひはそれで帰かえりましたけれど、また明あくる日ひになつても太郎たろうの姿すがたが見みえませんでした。学が校っこうへいつても、また家うちへ帰かえつてから出でかけていつても、ついに太郎たろうの姿すがたは見みえなかつたのです。

子供こどもらは口くちぐち々に、どうしたのだらうといつていました。するとそこへ、隣となりむら村むらから見みなれない男おとこの人ひとが子供こどもらの遊あそんでいるところへやつてきて、

「おい、おまえがたは、よく太郎たろうとけんかをしたが、太郎たろうは、もういなくなつたぞ。」

その男おとこの人ひとはいいました。子供こどもらは顔かおを見み合あつて、  
「小父おじさん、太郎たろうくんは、どこへいつたのだい。」

その見みなれない男おとこに聞ききました。

「どこへいったか私わしも知しらない、太郎たろうは遠とおくへ行ってしまつたんだ。」

と、その男おとこはいいました。

子供こどもらは不思議ふしぎでならなかつたのです。しかるに一日じつ、雨あめが降ふつてその明あくる日ひはいい天気てんきになつたときに、雪ゆきの上うへは鏡かがみのように堅かたく凍こおつて、どこまでも渡わたつてゆくことができました。村むらの子こ供どもらは、ちようど日にち曜よう日びであつたから、みなうちつれ合あつて、歌うたいながら雪ゆきの野原のほらを越こえて、はるかかなたに海うみの見みえる方ほうまでやつてきたのでした。すると、かなたには灰はい色いろの海うみが物もの悲かなしく見みえて、その沖おきの方ほうは暗くらくものすごかつたのでありました。



「ああ、これは太郎の吹いていたハモニカだ。こんなところに落ちていたよ。」

「といって、乙は雪の上に落ちていたニッケル製のハモニカを拾い上げました。それはいつか太郎が吹いているのを見て覚えがありました。」

「どうして、こんなところに落ちていたろうね。」

と、丙がいました。

「きつと太郎は海のおつちへ行って、自分の味方を連れてくるんだらう。そして、仇うちをするんだらう。そうすると怖ろしいな。」

と、乙がいました。みんな、おそれを抱いて海の方をながめま

吹ふいた。そして声こえをあげて村むらの方ほうへ逃にげ帰かえりました。寒さむい北きた風かぜが吹ふいている。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

※表題は底本では、「雪《ゆき》の国《くに》と太郎《たろう》」  
となっております。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪の国と太郎

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>